



こーひーぶれいく

フランス・アルザスの思い出

等々力節子

Todoriki Setsuko

おおよそ30年前、フランス・アルザス地方のストラスブールで、1年間の在外研究の機会をいただいた。ルイ・パスツール大学（現ストラスブール大学）薬学部の食品分析の研究室で、照射食品の検知技術の開発が研究テーマだった。

食品照射の仕事は国際対応が重要だからと、私が在籍した、食品総合研究所・放射線利用研究室の先輩諸氏は、皆、英国やドイツに留学していた。ドイツ帰りの室長の林徹先生も、（テーマは何でも良いから）とにかく若いうちに行ってこいと、私の海外渡航を強く勧めてくださった。

滞在先をフランスに選んだ理由は、私の語学力と、指導を引き受けてくれた Eric Marchioni 博士（現ストラスブール大教授）の人柄に拠る。

当時、科学技術庁の原子力在外研究制度の応募には、TOEFL スコアの提出が必須だった。自分も、“まずは留学する”ために、TOEFL 試験を受けたが、点数が上がらない。そうこうしていると、林徹先生が「ストラスブールに行ったらどや！Ericって、ええ奴がおって、面倒見てくれるて」と、国際会議から帰るなりおっしゃった。科技庁の制度では、フランス語圏の場合、同庁主催のフランス語研修の修了証書があれば、TOEFL スコアは免除される。素直な私は、修了証書（だけ）を目的に、30歳を目前にして、はじめてのフランス語研修（たったの半年間）に通った。

ストラスブールに着いてみると、「ええ奴（良い人）」は Eric だけでなく、皆が、とことん親切だった。研究室の Claude Hassellmann 教授は、住居が決まるまでの2週間、先生の母親が1人で住む、3階建ての庭付き邸宅に、私を受け入れ、教授の奥様がアパート探しに同行してくれた。到着日から何度か教授宅で食事もごちそうになった。

その初日の昼食時、教授は私に、フランス語の大事な使い方を教えてくださった。ワインを勧められた際、私は、なけなしの語学力で、「Merci（メルシィ）」と返した。すると、教授は、「セツコ、フランス語の Merci には、“Oui, merci” と “Non, merci” の2つがあるんだが、どちらなんだ」と、結構厳しい感じで言われた。付け焼き刃のフランス語は、結局、話せないまま帰国したが、日本語生活ではなおざりにしていた、自分の意志や興味をはっきりと率直に表明することの大切さを、フランス（語）生活の中で、何度も意識させられた。

上司が見初めた Eric にも、本当に世話になった。当時の彼は、未だ34歳だったが、教授から、CEN（欧州標準化委員会）の標準分析法作成の対応を全面的に任されており、同時並行で実施されていた IAEA の照射食品検知の国際研究プロジェクト（ADMIT）にも参加していた。滞在中にベルファストで行われた、当該プロジェクトの最終会合には、Eric の計らいで、私もオブザーバ参加させてもらったが、彼は、持ち前の人当たりの良さで、プロジェクトの集まりでも人気者だった。この会合への参加機会を得て、IAEA の活動を眺めたことや、欧州域内の分析法標準化のための協力関係（国を超えて空間共同試験を行う機動力）を実感したことが、後年、自分の仕事で役立った。

Eric は、研究室を離れても、私を気遣ってくれた。秋には、ワイン街道（La route des vins d'Alsace）ツアーに誘ってくれ、「これぞアルザス！（C'est Alsace typiquement.）」を繰り返しながら、0歳と3歳の子供を含む彼の家族と一緒に、酵母が泡を吹いている仕込み立ての新酒のテイasting「Dégustation」を楽しんだ。

数年前、Eric が日本の我が家を訪れ、私が撮った往時の写真を見ながら、昔話に花を咲かせた。彼は、0歳児の息子を背負って歩く自分の写真を見ながら、「ああ、Robin」と息子の名を叫び、目には涙を浮かべていた。幼かった息子を懐かしみ、アルザスにいる家族に、今すぐ会いたくなっている Eric は、正真正銘の良い（ええ）奴である。

（（国研）農業・食品産業技術総合研究機構）